

T・S・エリオットの学位請求論文 『F・H・ブラドリの哲学における 認識と経験』について（5）

今 村 温 之

序

本稿が(3)と(4)を後回しにして、(5)を今回に回した理由は、二つある。先ず、ここ半年位の間、第五章に取り組んでおり、この仕事を中断して、以前におこなった仕事を思い出しつつ(3)、(4)の草稿を纏め上げるよりも、一気呵成に今の課題を仕上げるほうが時間の節約になるからである。次には、この(5)において、エリオットの論文はその具体性を増し、以前おぼろにしか掴めなかった事柄が明瞭にその姿を現し、以前の箇所の再解釈に資する点がかなり出て来たため、(3)、(4)よりも先に(5)を仕上げる必要が出来て来た為である。無論、(1)～(4)迄の積み重ねが無ければ、本章の解釈も成立しなかった訳であり、ここには解釈学的循環があった。

又、エリオットの文芸理論は、本章において、その哲学的基礎を顕わにするのであり、エリオット批評家にとっては、本章の解釈は必須の要件である。本章の解釈は以上のような要請からなされた。

第五章 認識論者の認識論 （承前）

本章においてエリオットは、いわゆる非実在の対象に関する幾つかの事柄、及び実在論的想定に立つマイノングとラッセルの理論を取り扱う。この実在論的想定は非実在の対象を上手く取り扱えないし、更には指示、意味、コンテクストと

いった問題を提起することになる。

従って、いわゆる非実在の対象に関しては、非実在の対象は存在するかどうかという問題、非実在の対象に関する言語表現の真偽の問題が論じられることになる。非実在の対象の事例としては、幻覚対象、想像対象、語でもって指示される対象（丸い四角のように実在として信じられてもいなければ、事実として想定されてもいない）、といったものが取り扱われる。マイノングとラッセルは主に指示される対象を取り扱っているが、これら総ての対象に関して、実在と観念の関係について述べた事柄を思い出して欲しいとエリオットは考えている*。結論を先取りするなら、非実在の対象に関する問題の根源は、認識論上の不自然で誤った実在論的想定にあるということになる。その想定とは「外的実在性を持った、矛盾のない完全な一つの世界があるという想定」に他ならず、それは根拠がないばかりかある意味では間違ってもいるのである。「実在とは調和しがたい諸矛盾と宥和しがたい諸視点を含むものである。こうした言葉が一元論的 monistic 形而上学とどのようにすれば矛盾しないで済むかということは、別の個所で何としてでも明らかにせねばなるまい。 **」

*

第二章を参照のこと。

**

P.112. 以下、頁数のみを示したものの出典は、T.S. Eliot, *Knowledge and Experience in the Philosophy of F. H. Bradley*. London: Faber and Faber Limited, 1964.である。

1. (見える) 幻覚

(見える) 幻覚とは、マイノングやラッセルの指示される対象（丸い四角）と本質的には同じ問題であるが、もっと解りやすい問題でもある。(見える)幻覚も丸い四角も共に非存在者であり、共に意図される対象 (intended objects) である

のだから、それらは略同じ場にあると考えられるのであるが、(見える)幻覚を判断における非実在の対象として説明しない人々もあるのである。しかし、両者は共に程度の違いはあれ、それらに独自の实在性を主張しているのである。*

*

Pp.112-3.

1-1 幻覚には連関がない

幻覚 hallucination は、感覚上の錯覚 sense illusion とは異なる。これらの相違は最初に表象された対象の自己完成の方向にある。例えば、水中の杖は水の外の杖に連続しているのである。ところが幻覚の杖にはそうした連続がないのである。幻覚の杖は後退的に神経的变化という方向性を持った関係へと入って行きながら自己完成するのである。しかし錯覚の杖はその心像が意図する (intend) 方向へと自己完成するのである。つまり水中の杖と水の外の杖とは、二つの局面における同一の対象であり、これら二つの局面が寄せ集められると、連関においてそれぞれの局面と本質的に連続した一つの対象が与えられるものである。対象の原初の表象だけでは、対象の实在性ないし非实在性を決定するだけのものは与えられないのである。また、自らの自己完成へと内的に関連していないような、絶対的对象は原初的に与えられるようなことはないのである。何らかの印ではなく、こうした不定の自己完成をどれ程行ないうるかということが、表象の实在性を判断する際の基準なのである。従って、幻覚と丸い四角の場合、両者ともに实在性を主張しているのではなく両者ともに所与としての「ゆがんだ映像そのもの」を主張している、と取ることは間違っているのである。*

*

P.113.

1-2 幻覚の視点

幻覚が生々しいとか、心の映像として鮮明であるとかいった事柄は、幻覚の内的実在性とは関係がない。そうした事柄は完全に外的で対象的な問題なのである。三次元性はそれが内含される場所では必ず存在するのである。幻覚には三次元性がないのではなく、あるのである。幻覚を抱いている者にとっては、三次元性が与えられる視点だけしかないのである。絵画には三次元性（線が与える錯覚の方向）と一次元性（線や色彩そのものの方向）の両者がある。絵画は目の錯覚が与える見慣れた姿に似ており、絵画の意味や表示（meaning, reference）は線が与える錯覚の方向に対応し、絵の具の現実の配列は線の「実在的」諸方向に対応するのである。ところが線の見かけの方向の方も実在的方向と同程度に対象的（対象の一局面となりうること）であり、しかも線の見かけの方向は画像の「意味」に等しいのである。従って、絵画の三次元性と線の一次元性とは同程度に実在的である。絵画が三次元性を表示する限り絵画は三次元性を持っているのである。絵画が実在的である視点は二つある。しかし幻覚の場合、幻覚が実在的である視点は一つしかない。別の視点からは、幻覚は全く存在しないのである。「傍観者の視点からは、幻覚は（エリオットが）意図される半対象 intended half-object と名付けたものでもあろう。即ち、われわれの視点からは全く存在しない何ものかを、われわれは意図しているのである。幻覚の存在を多少とも認めるには、幻覚の（見える姿の）真実性を多少ともわれわれは認めなければ（信じなければ）ならないのである*」。 **

*

P.115.

**

Pp.114-5.

1-3 幻覚の存在性

エリオットは注の中でブラドリを引用しつつ、誤謬 error の存在性が持つ難しさを、ほぼ次の如くのべている*。「誤謬とは危険なテーマである。非存在と実在の中間者は存在しない。しかし誤謬はそれらの何れでもない。誤謬は存在しないが、何らかのものとして存在する。偽なる現象には、偽なる現象に属さない実在に帰属する何物かが**ある**。偽なる現象が実在的でないならば、それは無であるから、それは偽なる現象であることはない。偽なる現象が偽であるならば、それは存在する何らかのものであるから、それは真の実在であらねばならない。現象は何処かに存在せねばならないのである。

誤謬は偽であるから、絶対者に属することは出来ない。しかし、誤謬は有限なる主体にも属することが出来ないのである。何故なら、あらゆる内容を備えていても、有限なる主体は、絶対者の外にあることは出来ないからである。にもかかわらず有限なる主体が絶対者の外にあるとなれば、有限なる主体とは**無**であろう。従って誤謬には故郷がないのである。存在における場がないのである。にもかかわらず、誤謬は存在するのである」。以上は誤謬に関するものであるが、ここには、存在しないにもかかわらず、存在する、ないしは、存在するのでもなければ、存在しないのでもない、幻覚の持つ問題点がよく表現されているのである。要するに、幻覚は形式論理的に分析しても矛盾に陥るだけなのである。幻覚は存在する限り、実世界のあらゆる特徴を有しているものであり、信じられている限り、存在するのである。確かに通常、幻覚には知覚の契機があまりない。しかし、全くないとは言えないのであって、この点が重要なのである。

第一章で述べたように、感情 feeling と対象性 objectivity とは互いに不可分離的に絡み合っているものであり、両者は一体をなし、連続しているのである。情動 emotion は自らを対象化する傾向があるのであり、感情とイミジとは分かちがたく絡み合っているのである。これが、幻覚は存在しないにもかかわらず、存在すると一般に言われるが、幻覚の真のあり方なのである。 **

*

P.115. 原注に於いて. 出典：*Appearance and Reality*, pp.164-5.

**

Pp.115-6.

1-4 事実としての所与, 無条件の前提, 真の知覚とは?

——視点とは解釈不能であり, 対象的の局面毎に視点は異なる——

子取り鬼 bogey に怯える子供が熊を「見ているのかも知れないと思う」とき, この語句の意味は決して自明ではなく, その子が熊を見ているとか見ていないとか言うための基準を, われわれは全く持っていないのである. 感情と対象性との, 感情とイミジとの一体性の理論に基づく限り, 熊の幻覚の対象的諸関係のある部分のみを取り出し, これのみが意味を作り出すのであり, 他の部分や感情の部分は意味を構成しないと言うのは正当性に欠けるし, 不可能なことである. 鬼に怯えている子供は「熊」と言うときに, 自分が何を意味しているか知らないし, 子供を観察しているわれわれもその子が何を意味しているか知らないのである. また, その子が「熊」なるものに脅かされたとき, 自分が何を知覚したのかをその子はよく知らないし, その子が知覚したことを, われわれも亦よく知らないのである. その子は形而上学的世界に没入して熊なるものを見ているのである. つまり一つの視点のみに没頭して幻覚を見ているのである. 実在の熊と錯覚の熊との違いは, 二種類の対象の間の本体的相違ではないのであり, 関係の充全性の違いなのであるから, 熊という一語が実在と誤謬の双方を含まねばならないのである. しかし**実践的には**, われわれは, ある知覚は間違っていると言ひ, またある知覚は正しいと言うのである. ある知覚が間違っていると言えるのは, 間違った知覚の際に現われる対象に善く似てはいるが, それとは異なった (真と思える) 対象が現実にならぬわれわれの前であつて, この (真なる) 対象をわれわれは知覚しておつたのであり, この (真なる) 対象からわれわれは間違つた見解に到達したのであると言ひ得るときだけなのである. 従つて, 最初の知覚と二番目の知覚が非常に

よく似ていると、われわれは余り間違いがないと考え、最初と二番目が余り似ていないと間違いが大きいと考えるのである。ともかく、誤謬が誤謬なる所以は、われわれが始終（即ち最初の知覚のときも二番目の知覚のときも）真なる対象を知覚していたのだと、實際上、想定出来るから、其処から最初のときに間違っただけの推論を行なったと言えるからなのである。実際上は、真に把握された前提から、間違っただけの推論を行なう可能性があると言えるのである。

しかし、理論上は、二番目には前提が正しく把握されているが、最初のときはその前提が正しく把握されていなかったとは言えないのである。何故なら、最初のときの前提と二番目のときの前提とは同一ではないからである。

「こうした前提（比処ではわれわれが推論を開始する知覚のこと）とは、其処から展開して行くものに関係した、それ(that 人が瞬間的に知覚している与件)という前提なのである。この意味では、あらゆる推論は真なる推論なのである。何故なら、形而上学においては、推論を前提として更に推論を重ねて行くということはないからであり、展開して行くので把握することも分析することも出来ない出発点があるからである。というのは、こうした展開活動は単なる加算的活動ではないのであり、内的展開であるからであり、出発点自体が変わってしまうからである。出発点が絶対的に何であったとは言えないのである。……真なる知覚から、間違っただけの対象が推論されたとは、相対的にしか、言えないのである。實在の対象は“其処”にあった（とする）のであり、実際上、實在の対象はその知覚が表示していたものである（とする）のである。しかし、真なる知覚と偽なる知覚とを、同一物を一方は表示しているが、他方は表示していないとして、説明するやり方は、本質的には実践的やり方なのである。何故なら、そうしたやり方は、われわれが認めることのありえない視点の解釈という間違っただけの解釈を伴うのであり、しかも解釈とは本質的に立証不能なのである。*」**

形而上学的与件を前提として、実践的（常識的）に形式論理的推論を行なっても、形而上学的には視点の解釈という間違いを犯し、実践的には理論と形而上

学に反する知を得、理論的には常識的形式論理のみに従うということになり、形而上学的知と実践的知と理論的知とが分裂に至るのである。

幻覚とは内的視点のみからの感情的光景であり、自己-対象の世界ではない。あらゆる理論的説明を拒否するこの世界は、本質から離反した実存の世界であり、コーリオレイナスやオセローのような内と外との相克するエリオット好みの人物の世界でもある。ここに実存主義とエリオットのテーマがある。

*

P.117.

**

Pp.116-7.

1-5 幻覚と誤謬との違い

先に述べた如く、われわれは誤謬を同類の实在と比較するが故に、誤謬は誤謬なのである。ところが幻覚には比較すべき同類の实在がないのである。とは言っても、幻覚と誤謬の違いは、絶対的なものではなく、度合の違いなのであり、幻覚の場合は、われわれは同一のものの違いを比較するのである。例えば、現実にあるがままの部屋と幽霊のいる部屋とを比較し、それが同じ部屋であるということが、間違いの保証となるのである。先に述べた如く、一方の対象(現実の部屋)が他方(幽霊のいる部屋)に比して肯定され、実在的でありつづけ、他方はそのではないから、他方を非実在的であると言うのである。幻覚は誤謬に比して、その独立性(非連関性)故に、実体性の度合が高いから、それ自身の非実在性以外には自身と比較するものが無いのである。従って、幻覚はラッセルの「単純な論理的誤謬*」ではない。何故なら、幻覚は対象性の方向において、実在世界と連なっていないからである。幻覚は「其処」に現実にある対象を表示するとは解釈できないのである。幻覚は実在世界に連なってはいるが、その実在的関係は生理学的基盤の方向に向いているのである。従って、幻覚の視点は誤謬の視点とは相当

異なる視点なのである。 **

*

mistake. See Bertrand Russell, "The Philosophy of Logical Atomism" in *Logic and Knowledge*."

**

P.117.

1-6 所与の事実ないし表象の直接内容のみでは、幻覚と対象は区分不能

先に理解した如く、(重量, 堅さ, 内在性といった)属性の点に於いては、幻覚は信じられている限り、いわゆる実在の対象とは異なる。われわれが(現実に)意図すると言われる何か別の(実在の)対象との比較には於いては、信じられている限りの幻覚はやはり意図された実在の対象と異なることはない。幻覚の独自の实在性は、その表象の直接の内容によっては、決定されない。また、実在の対象の实在性も亦、その表象の直接内容によっては、決定されることがない。ある経験の真偽は、その経験を越え出て行く以外には、検証の方法がないのである。 *

*

Pp.117-8.

1-7 所与としての事実を絶対的なものとして出発すると 如何なる矛盾に陥るか

しかし、以上の如き考え方に反する、幻覚と存在する対象との中和策が存在するのである。誤謬、幻覚、実在は、それぞれ独自の实在性があるのではなく、等しく実在的であるとするのである。即ち、ある経験を越え出てその独自の实在性

を理解するのではなく、所与としての諸事実を絶対不変の物として、等しく実在的とする考え方である。この考えによれば、「誤謬、幻覚、実在は等しく実在的であり、恐らくは究極的に調和する。しかし、われわれは実際には非常に限られた実在の野にしか関係できない。そうした実在の野は、その実在の野からわれわれが除外する断片が実在的でないのと同様に、絶対的視点から眺めれば実在的ではない。……適切に理解されるなら、幻覚も実在的であり真である。間違いを述べているときでさえ、実はある真を意味しているのである。限定中心の経験にとっては必要な分離ではあるが、われわれが勝手に実在の全体からある一部を実在として分離したから、他の実在が非実在へと追いやられざるを得なかったのである。この限定された視点からわれわれが熟知する世界は、人為的な構築体である。われわれの視点は全体を把握できるほど大きくはないので、われわれは残余をわれわれの脆弱な構築体には納まらぬ破片として考えるのである。*」ということなる。

こうした考えは誰かの考えかと言えば、それはホルト教授**やブラドリの考えである。ホルト教授は1—1で述べた「ゆがんだ映像そのもの」を主張する人物であるが、「その……内容(映像)は孤立して存在するのであり、それ自体では真でも偽でもない***」と述べている。観念論者としてのブラドリは次のように述べている。「最初のうち、われわれはAを経験する。ところがAは相矛盾する形容詞cとbを有している。そこでわれわれはこの主語の内部に区分を設けることによって調和を産み出して行くのである。あのAは現実にはAそのものではなかったのであり、Aの内部にある一つの複合体か、乃至は、(此处ではそうした複合体ではなく)Aが内包されるより幅の広い一つの全体だったのである。実在の主語はA+Dで(あったので)あり、この主語が、区分によって解消される、先程の矛盾を内含しているのである。Aはcであり、Dはbであるからである。****」

これら二つの言明は実質的に同じことを言っているように(エリオットには)思える。前者は「内容は孤立して在る」と述べ、後者は「変質した内容(A+D)は最初から(Aではなく)同じ内容(A+D)であった、即ち、内容は変質せず孤立している」と述べているからである。

これらの主張は以下の如き自家撞着に陥るのである。即ち、これらの主張によ

れば、幻覚の場合にも、最初に現前する実在の対象が先ず与えられ*****，これが真でもあれば偽でもあるとして二通りに人為的に解釈される（幻覚は一般的に実在するとも存在しないとも考えられる）のである。しかし、二通りといっても一時に二通りではなく、一時においては幻覚という対象は実在するか存在しないかの何れか一通りでしかありえないということは自明の理である。幻覚はcとbを共に有しているということ自体が先ず問題である。ところがこれらの主張によれば、実在の主語がAではなくA+Dであるとしても、cとbとが最初に表示した主語はAそれ自体ということになる。しかも（無矛盾性を重んずる観念論者にとっては少なくとも）ある主語とは別の主語を表示する性質はそのある主語とは別の性質なのである。ところがホルト教授にとっては、幻覚経験Aには、実在の矛盾c，bが存在するのである。にも拘らず、彼によれば「実在で以て、われわれは矛盾から最も懸け離れたものを、意味するよう*****」なのである。*****

所与の事実を絶対不変のものとして考えると、以上のような矛盾に逢着するのである。ブラドリが絶対的視点に立ち、種々の実在を均一なる実在として見るとき、彼はこのような矛盾に身を晒すのである。しかも彼はこのとき絶対経験と直接経験（感情）との二元論に陥っているというのが筆者の所見である。

*

P.118.

**

Edwin Bissel Holt (1873-1946)

Holt, Edwin B. and Others, *The New Realism : Cooperative Studies in Philosophy*, New York, 1912, p. 357.

F. H. Bradley, *Appearance and Reality*, Oxford, 1946, p. 170.

現実態が可能態に、説明的、時間的、実体的に先行するということを言っている

のではない。現実態と可能態は関連しているが、この場合の實在の対象は孤立しているからである。

Holt, *The New Realism*, p. 366.

Pp. 117-9.

1-8 實在の対象は超越するか？

誤謬の独自の實在性を幻覚や外的實在性の實在性と均一に溶解することによって、それを説明することは、究極的な説得性を持ち得ない。均一の實在に溶解することを唯一正当化するものはその究極的實在性にあるのではあるが、均一の實在を主張するこうした實在論による説明は明らかに観念論的である。何故ならその基準は無矛盾性にあるからである。しかも究極的な無矛盾性が仮定されているのである。この為、完全に外的實在性のみからなる世界におけるように、純粹に非實在の対象が残る余地がなくなってしまうのである。このようにして、観念論と實在論の二元論が生じるのである。この為、両者の間に孤立的対応が想定されざるを得なくなるのである。「實在をX (a b c d e f g ……から成る) としようではないか。そしてわれわれは此の實在の部分的な姿 [a] を得られるだけとしようではないか。*」と言うことになるのである。しかし、形而上学においては、こうした部分的姿は「それ (that 瞬間的に熟知された与件) という対象の姿であり、部分的ではない完全化した対象の姿ではない」などと言うのは、単なる婉曲的な言い回しにすぎない。しかも、こうした部分的姿が自己完成してゆくと考えることは、把握された實在が順応しない別種の實在があるということ認めることに他ならないのである。なるほど、部分的な姿とか幻覚といったものはそれ自身の自家撞着と超越とを間接的に意味するとも言えよう。しかし誤謬の「超越」にあっては、實在の対象として信じられている誤謬は取り除かれることはないというのがエリオットの持論なのである。信じられている対象は超越されないので

ある。だが視点は超越されるのである。即ち、幻覚を対象としてではなく、視点の中の一要素として考えることによるのみ、幻覚は「超越される」、「変質する」、「溶解する」と言われ得るのである。ブラドリやホルト教授の理論は、非実在が実在の方向へと押しやられ、適切なる取り扱いを受けていないという点に不満があるのである。われわれが対象と思っていたものが、対象ではなかったのである。**

しかし先に理解した如く、対象が対象であると考えられている限り、対象は対象なのである。誤謬から真への変化は、そうした対象における変化ではないのであり、状況全体における変化なのである。従って、そうした対象は、それが対象である限り、実在の対象として歴史の中で存続することが認められねばならない。私が体験していた幻覚は、ジュリアス・シーザーが死んでこの世にいないから非実在であるのではないのと同様、非実在ではないのである。たとえ世界が、観念論者達がわれわれにそう考えとよく迫るように本質的に関係していても、非実在の対象はそれにも拘らず存続し、実在を左右しているに違いないのである。これらのことは感情と対象性の連続の理論に基づくのである。エリオットは自注の中でジョウアキム***を引用し面白いことを述べている。それに依れば、「誤謬を犯している間は、誤りを犯した人間の苦悩は、その人間にはないのである。これが誤謬の引き起こす諸悪の根源なのである。彼は自分の誤謬判断が持つ彼にとっての真実を信じて疑わないのである。しかも、彼にとって真なるこの誤りは、いつ迄も消滅することがなく、いつ迄経ってもより充全なる知識の要素へと変形することもない。天文学の素晴らしい発展も、ガリレオに対する迫害を無効にすることも、天文知識へと同化吸収することもないのである。」といった旨****が述べられている。ともかく、感情と対象性の連続の理論に依れば、幻覚は信じられている限り対象であるのであり、その部分は実在として実在性を発揮するのである。しかしその部分はより充全なる現実態へとは超越しないで歴史的現実世界に存続するのである。*****

*

Bradley, *Appearance and Reality*, p.170.

**

P.119.

Harold H. Joachim.

Joachim, *Nature of Truth*, pp.144-5.

P.120.

1—9 世界は対象のみの組み合わせ（外的実在性）から成っているか？

幻覚と誤った判断とは、その状況は本質的には違くない。誤った判断は非実在の対象の時間的存在を主張し、幻覚は非実在的对象の unreal objective の無時間的存在を主張している（対象となる可能性のないものを対象となる可能性があるとする）と言えよう。もっとも、対象（現実態）と对象的（可能態）との、そして時間的存在 existence と無時間的存在 subsistence との、境界線は既に見たように明確には引くことが出来ないのではある。存在しない何ものかが存在すると主張されているのである。もっとも、ある対象の存在を主張するには、われわれは何らかの形でその対象を知覚せねばならないのではある。「誤謬という問題は拡大された関係体系でもって解決されることは不可能である。……何故なら、各現象を特徴づけるはっきりした感覚ないし質といったものがあり、しかもそれは拡大された関係体系が出来たときにも猶その体系の外にあるからである*」。つまり、誤謬の対象や幻覚の対象は、それらの現実存在が信じられている限り、現実存在するのであり、このときの感覚は、誤謬や幻覚に気づいたときでさえ、感情の世界に残って生きているのである。「こうした理由から、われわれが世界を対象の組み合わせで以て出来上がっていると見做す限り、われわれは如何なる解決にも至らないのである**」。世界は対象のみから出来てはいないのである。***

*

Appearance, p.172.

**

P.120.

P.120.

1—10 対象と幻覚の違いは対象同士の違いではない・対象と幻覚の比較は 真と偽の視点を媒介する第三の視点において行われる

それでは、対象と幻覚の矛盾は如何にすれば共通の土俵における比較になるの
であろうか。次にエリオットはこの問題に取り掛かるのである。

幻覚と実在との違いは、対象同士の違いではないのであるから、非実在の対象
と実在の対象との間の違いとは言えない。というのは、1—9で考察したように、
あらゆる対象は実在的であり、幻覚の非実在性とは対象としての対象の非実在性
ではないのであって、(対象としての実在性ではない実在性において)対象が入っ
て行くことの出来ないある種の関係のために、幻覚は対象としては非実在的な
のである。われわれが常に忘れがちなのは、幻覚が対象ではなく実在のある一領域
であるという面なのである。幻覚の存在は内在的なのである。尤も外在的でもあ
るのではあるが、われわれが調和せねばならぬ矛盾するものは、二つの対象では
ない。孤立した対象同士は、ホルト氏の考える如く、(その同質の実在性ゆえにで
はあるが)互いに矛盾することがないのである。矛盾しているものは二つの視点
なのである。尤も対象はその視点から分離されることはないのであり、このこと
は対象そのものを主張するホルト氏の考えとは反対である。(但し、矛盾するもの
は二つの視点であるが、二つの視点が同一の対象を意図することはあり得る。例
えば小説の登場人物。後述。)

幻覚とは感情の孤立した全世界なのである。そして対象とは対象化された限り
での感情の世界を孤立させたものなのである。従って、これら二つの世界を比較

するには、あなた方が二つの対象を直接に比較するようなわけにはいかないのである。そうした二つの世界の比較は、偽と真の二つの視点を媒介することによってのみ、(第三の視点に立つことによってのみ)可能である(孤立した一方の視点と孤立した他方の視点とは、第三の視点において媒介せずとも、あなた方が望みのままに対象的なのではあるが)。だが、われわれは、一方の視点が正であり、他方の視点は誤であるとは言えないのである。何故なら、こうした言い方は、一方の視点は実在の対象を捉えているが他方は非実在の対象を捉えていると考えることにより、即ち対象同士の矛盾により正、誤、を考えることになるからである。一方の視点の他方の視点に対する主張は、また他方の一方に対する主張は、どう言う訳か第一と第二とを内含する第三の視点に於いてなされる以外にないのである。この第三の視点に於いてのみ、第一の視点と第二の視点とは、その第三の視点の中に納まるのである。真理は矛盾を内包しているのである。そして第三の視点にわれわれが到達したことをわれわれが意識するようになると、われわれは実は既に第四の視点にいたのであり、この第四の視点の中では、第一と第二の視点とが再び新たに自己主張しているのである。即ち、その一と二とは、第三におけるのとは異なった一と二なのである。従って、われわれが、ある特称的な視点(第三の視点)の下にある限りにおいて(第三の視点を孤立したものとして認識しない、即ち、第四の視点に立たない、限りにおいて)、真と偽の矛盾は破棄されると考え得るのである。われわれの視点に於いて、幻覚と実在の、感情と対象の二元論的世界は一元論的世界へと統一を見るのである。

幻覚を主張することは非実在の対象が実在の対象と矛盾していることを主張することのみではない。幻覚は主体の(視点の)変化も内含している。幽霊を見ていた**私**(限定中心)は消化不良に悩んでいた**私**(魂ないし自己)ではないのである。視点の変更においては、ある意味では少なくとも全体的変化が生じるのであり、こうした状況変化にあっては、如何なる同一性があるかその変化の中で持続するかについては、後の課題となるのである。*

*

2-1 想像の対象

想像の対象は、普通は想定物と呼ばれ、最初から偽とされるものだから、信じている間だけ現実存在する対象（である幻覚や誤謬）とは、一般的にははっきりと区別されるが、後者は真の局面と偽の局面を有しているのであるから、こうした区分はエリオットには不要と感じられる。後で述べるように、想像対象は過ぎ去った幻覚を表示する際に生じる二つの対象、過去の経験という対象(直接対象)と幻覚の際に見えた対象(間接対象)、の内の後者であると考えられるのである。

あらゆる対象は、それが注意される限り、実在的である。そして、われわれが誤謬であったとか幻覚であったとか主張するときには、われわれは孤立した対象ではなく、その経験に注意しているのである。私が「黄金で出来た山」に注意するなら、それはその限りにおいて実在的である。つまり、われわれがその非実在性と呼んでいるものは、注意された後の関連から生じてくるのであって、その直接の表象から生じてくるのではないのである。表象自体などというものはないのであり、われわれが表象というときは、実はそれは如何なるときにも現実には表象されたものではないと言う意味での「全体の中の一部」なのであり、表象されているものは実は（関係の中に置かれた）対象なのである。それは何かの表象としてではなく、実在として表象されているのである。われわれが、過ぎ去った幻覚に関連して行くときには、対象が二つ生じるのである。直接の対象は幻覚としての経験である。間接の対象は幻覚の際に信じられていた対象の方である。そして、想像的であると認識されている対象は過ぎ去った幻覚の間接の対象と本質的に異なるのである。*

*

2-2 想像（想定）は如何なるときに行なわれるか？

直接の対象は、誤謬としての経験の方であるとエリオットは言った。ところが、この直接の対象はほんの少しだけしか実在の対象でないのである。つまり最初の分析にあつてのみ、意図された対象なのである。何故ならこの対象は、心理学的対象と同様、生理学的な部分と実在的な部分とに分かれてしまうからである。一方において、われわれは「現実起きた」事を意図するのであり、それが「精神」の中の「諸観念」ならば、こうした諸観念は生理学的過程へと溶解して行くのであり、神経学者によって記述されないような事は何も「起こらなかった」のである。他方において、われわれは被験者によって意図された対象（間接対象）を意図するのである。そして、これは上手くいく限り、われわれの側における、真の想定のカースとなるのである。

「被験者が意図すること」をわれわれが意図することは、われわれの世界における実在的なものとの組み合わせ、われわれの世界における実在的なものを、われわれが意図することなのである。しかし、そうした「相手が意図すること」を意図する際の経験全体は、われわれの世界において実在的なのである。

われわれは普段、他者の経験という実在に接触せざるを得ないのであり、その実在は、常にわれわれに影響を与えつつある。こうした場合、想定が実は実在の一部となっているのである。

他者の意図を想定するときは（想定が実在となっているときは）、想定は現実になされた想定であるというだけでなく、それは実在であるということもわれわれが認識している対象（即ち他者の意図）を把握する為に、われわれが想定を行なわざるを得ないという事でもあるのだ。こうした場合、われわれは、マイノングによって無視された想定の特徴に、直面するのである。つまり、幻覚の際に見える対象の想定とは、存在しているのかどうか解らない対象が想定されるような想定ではないという事である。幻覚の際に見える対象の想定とは、存在しないということがわれわれに解っているような対象が想定されている、という事である。

われわれは、被験者の偽なる経験から独立した対象を意図することなくしては、

「対象を意図すること」を意図することが出来ないのである。そして、この独立した対象を間接対象とエリオットは呼ぶのであり、その一方では彼は偽なる経験を直接対象と呼ぶのである。

しかも、**他者**の経験が幻覚ではなく想定であるときには、問題は更に複雑となる。相手が「黄金で出来た山」を「想定」する。私はこの想定経験（直接対象）を対象として意図する。理論的には、私は、私の側で、金の山に対して如何なる態度をも取ることなく、相手の想定を想定できるはずである。ところが、私はその山で間接の対象をこしらえざるを得ないのである。つまり、相手の想定を意図することによってその想定を意図するだけでなく、私が直接に間接の対象を意図することによって、その想定を意図せざるを得ないのである。仮令、対象について私が何も知らないときでさえ、又、対象の名前が私にとり何の意味も持たぬときでさえ、私は直接に間接対象を意図せざるを得ないのである。従って、この点が幻覚よりも複雑な点である。他者の幻覚的对象を想定する場合には、自分も亦幻覚を見る必要はないのである。

従って、(他者の行っている想定という)実在を把握する為には、再び私自身が想定を行なわざるを得ないという結果になるのである。心理学的対象と通常呼ばれているものを把握するには、即ちこの場合には、他者の行なう想定という莫大な数の実在の対象を把握するには、われわれの方も想定を無数に行なうのである。*

*

Pp.122-3.

2-3 想定とは非実在の想定ではなく、実在の想定（把握）である・

創作（フクション）も実在の創作である

想定とは、以上の如く、単一の活動ではないのであり、実在の受容（他者の想定を想定する場合）から拒絶（他者の幻覚を想定する場合）に至る過程のあらゆる活動を包摂させられている言葉であり、この点がマイノングの想定 *Annahme* と

異なる点である。想像的あるということが知られている対象（間接対象）の把握は他の如何なる対象の把握とも本質的には異ならない。もっとも、観念が順応して行く外的實在にわれわれが奇妙な手を加えなければの話ではある。小説を読むとき、われわれは登場人物と状況を如何なる實在性とも関係なく単に偽として想像（想定）するなどという事が可能であろうか。われわれはそれらを（われわれが接する他者の想定を想定する場合のように）實在として受容する（但し、他者が幻覚のときに見る対象は、存在しないことをわれわれが知っているのであるから、實在としては拒絶することになる。）か、それらを意味として、即ち作者の視点から見た實在に対する批判として、考えるかの何れかであろう。われわれがこれら二つの極の間を揺れ動くのでなければ（一方は「写真的に鮮明な」小説であり、他方は無味乾燥な「問題小説」である）、小説はわれわれに殆ど意味を与えることがないであろう。成る程、登場人物も状況も総て「想像上のもの」である。しかしそれらを想像上のもの（偽なるもの）として把握する、孤立した「浮遊している」活動が一つだけでもあるのであろうか。登場人物や状況が想像上のものである為には、それらは実在的な何物かと対比されねばならない。そして、対比によって得られる、細かで正確な類似点と相違点がなければならぬ。何故なら、想像上の対象が対比される實在のタイプは、その想像上の対象が恰もその内の一つであるかのような實在のタイプであらねばならないからである。想像上の対象が、こうした實在を意図しつつも、その實在へと連関しない限り、そのような孤立した対象は、何らかの實在性を持った、即ち想像上の、対象ではないのである。そうした孤立対象はエリオットが以前に（第二章で）「孤立した観念 mere idea」について述べたことが当て嵌まるのである。もし創作された（in fiction）登場人物が想像上の対象であるならば、それは實在と結びつかぬ「想像的である」ことをともかく超えていなければならない。即ち、それはそれが連関することのない實在を孤立しながら意図することを超えていなければならない。創作された登場人物は以上のような實在と比較されねばならない。比較される為には、それは孤立した表示を超えていなければならない。それは、その表示とは区別されたそれ自身の實在性をそれが持つような、別の局面を持っていなければならない。創作

(フィクション) はかくして創作を超えるのであり、実在の創作なのである。*

*

Pp.123-4.

2-4 創造的実在性と批評的実在性

以上の如き理由から、われわれは創作された意図される対象（間接対象）を、孤立した表示の局面と実在性の局面とに分析する。そしてこの実在性はこれはこれで、孤立した対象ではなく、意図される対象なのである。何故なら、この実在性は、作者の精神の中の本に書かれる以前の登場人物から登場人物を本の中で表現している記号にいたる迄の過程の総てを内包しているからである。成る程、われわれは登場人物を作者の精神に生じた表象として意味しめしよう。しかし、創作された人物は、作者が「精神の中に抱いていた」と解釈される独立したこととは区別される、われわれにとっての現実存在を所有することが多いのである。創作中の作者とその作品を読む作者とは異なった視点に立っている。自分の作品を読む作者と作家の作品を読む読者とは、同類の視点に立っている。作中人物の由来や意味に関して作者が本気で行なう説明よりも、その人物に関するわれわれの解釈の方がずっと上手いと感じられることがよくある*。創作された「生き生きとした**」人物像は作家によって意識的にこしらえられたものでは決してない。それどころか、成る程そうした人物像は作家の個人的性格に寄生したある種のできものであって、それは内的必然性によって成長するのであるが、また外的付加物によっても成長するのである。従って、作家が批評する際の視点は、彼が登場人物を創造した際の視点の内に完全には納まっていないのである。批評の視点と創作の視点との違いは絶対的なものでは決してないのであり、作家が創造の視点から批評の視点へと、また批評から創造へと、いつ変わるかを知ることは非常に難しいのである。更に、エリオットは注において、「批評の視点と創造の視点の組み合わせはモリエールやスタンダールに見られる。その一方、バルザックやドストエ

フスキーに登場する人物は生々しく追体験される局面の方がはるかに強い」といった旨を述べている。「生々しく追体験される***」登場人物、即ち、「その人物が属しているこのような種類」を示唆することによってだけでなく、類から独立した的確さによって現実的である登場人物、はそれらの点において成功している限り、創造的に現実的（実在的）である。

ところが、作中人物を想像上のものとして取り扱うことは、没頭の視点から批評の視点への転換を伴うのである。没頭的追体験としての実在以外にも、作中人物はこの実在とは一致しない別の諸関係を持っているのである。作中人物は別のコンテクストにも内属しているのであり、没頭的追体験の実在性とは両立しない諸関係を持っているのである。従って、生々しく体験される作中人物のこの実在性と矛盾する非実在性は、没頭的追体験としての実在性の中にはないのであり、そうした実在性を遥かに超えて広がる諸関係の中にある。没頭的追体験としての実在性とはその表示にある。ところが、そうした実在性を遥かに超えて広がる諸関係を辿って行った先にあるものとしての非実在性とは、「**想像的**」対象としての作中人物の実在性なのである。登場人物は、想像的对象としては、非実在的どころか、実在的なのである。実在の対象として、登場人物は想像上のものなのである。****

*

「作者が自分で理解していた以上に彼をよく理解する」という命題は解釈学にとっては馴染みのものである。西村皓，森田孝，監訳，ボルノー『解釈学研究』（玉川大学出版部）47，に詳しい。原著：Otto Friedrich Bollnow, Studien zur Hermeneutik, Band I: Zur Philosophie der Geisteswissenschaften, 1982.

**

原文では vital.

原文では lived through: 完全に生きている

Pp.124-5.

2—5 想像上の対象は、意図する視点と、意図の実現された 視点とを、仲介する視点から観られたものである

以上のような理由から、想像的对象には、それが「実在的であろうと意図する局面、意図を実現しようとする局面」と、その〔意図としての実在性の局面、実現された意図の局面〕との二つの局面がある。前者の局面としての想像的对象には、諸関係が不足している。後者の局面としての想像的对象には諸関係が沢山ある。厳密には、如何なる想像的对象的 (imaginary objective 実在へと至ることのない想像物) も存在しない。何故なら、われわれは二つの視点を内包する一つの複合体、即ち、諸関係の不足した実在的对象と多くの諸関係から成る意図された対象との複合体、に注意するからである。創作物としての登場人物について語るとき、われわれは〔ある視点から観て実在的な対象〕と〔別の視点から観て実在的なある種の存在者 (究極的には自然なもの) (「想像的」対象)〕との間の一つの間を意味しているのである。想像的对象とは、活動としての観念による高度に複雑な構築物なのである。それは、それ自体としては、上記の二視点を内包する第三の視点から観てのみ、現実存在するのである。しかし、これら二視点は相互に異質であるだけではないのであり、互いに密接な依存関係にもあるのである。何故なら、意図された対象の実在的な諸関係 (創作され個物へと限定された登場人物の発生に伴った心的な諸状況と、その登場人物の実現に伴った自然な諸状況) は、創作を実現しようとの意図なくしては、そうした関係としての実在性を持ち得なかったであろうからである。*

*

P.125.

2-6 作家が創作するときの諸視点とそれらの連関

成る程、作家自身は彼の創作を、意図を実現せんとして、注意しているだけではないのかもしれない。つまり、作家は創作 fiction が実在的であるような視点から創作を意識していないかもしれないし、現実には如何なるときにもそうしたことはないとエリオットは想定するのである。又、作家は創作という現実化活動において、観念活動が持続的に行き来しているのを意識しましょう。従って、作家がある観念活動の結果得られた一つの所産を捨てて、他の所産へと向かうにつれて、意図される実在は移動し変化するのである。更に又、作家は感じられた情動や抽象的諸観念に「肉と血を纏わせる」ことによって、そうした情動と観念を表出しようとする努力を意識しているのかも知れない。こうした所から、創作活動をしている作家は、如何なるときにも又実際においても、単一の視点にのみ立っていることはない、そして又、一つの視点のみが他の諸視点を排除して専有されるような局面は実際には如何なるときにも存在しないと、エリオットは考えるのである。ところが現実には、「想像上の対象」はこれら総ての諸関係であり、実は、これらの諸関係なのである。ここで、「ある」とは時間的現象的側面ではなく、無時間的構造的側面を言っている。*

*

P.125.

2-7 想像上の対象の存在様態

想像上の対象は、無時間的・理念的に存在するとも言えないし、時間的・現実的に存在するとも言えない。われわれが創作された登場人物について考えるとき、通常われわれは上記の複合体のある一つの局面について考えているのである。ベッキー・シャープは『虚栄の市』の時間秩序の中に現実存在する。しかしこの時間秩序は、小説というコンテクストにおいてのみ現実存在するのであり、孤立し

た状態では現実存在しないのである。ベッキーはサッカレイの人生における一つの出来事として現実存在する。又、個々の読者の人生における一つの出来事として現実存在するのであるが、これは、個々の現実の人間が、彼が接触することとなるあらゆる現実の他者の人生において一つの出来事として現実存在するのと同じことである。ところがベッキーという語でもって指示される対象は現実存在しないのである。何故ならその対象は幾つもの視点の同一表示*以外の何ものでもないからである。 **

*

identical reference: 同一の対象を表示すること。

**

Pp.125-6.

2-8 マイノングの想定との違い

想定とか享受 entertainment とかいったものは、決して受容とか拒絶とかいった単一の活動ではない。想像上の、ないしは享受の、対象とは、単一の対象ではない。成る程、幻覚が（視点が一つしかなく、そこから見られた感情的ないし情動的）実在であったのと同様の在り方で実在的な単一な対象というものがあるのである。しかし、こうした単一の対象は想像上の対象の一部分に過ぎないのである。

想定に関するエリオットの理論がマイノングの想定 Annahme に対して優位な点は、これがブラドリの浮遊観念の考え方（観念は実在から分離し浮遊しているのではないという考え）とずっと矛盾しない点である。マイノングの想定とは、判断以前の判断であり、従って判断対象（=対象的）を持つが、実在に到達することがない。それは実在に定着することがない仮初めの受容ないし拒絶という単一の活動なのである*。明晰判明を重んずる認識論者のマイノングは「外的実在性という同質の実在性を持った、矛盾のない、完全な一つの世界がある」と考えてい

るが、こうした考えによれば、非実在の対象を想像する想定とは実在から遊離したものとして考えざるを得ないからである。従ってエリオットによれば *Annahme* とは実在に至ることのない浮遊したままの観念に他ならない。それは、表象と判断との中間に浮遊しているのである。

ところが、想定に関するエリオットの理論においては、客観的と主観的とを、そして又、外的実在と心的実在とを、分離する必要はないのである。意識の中に共に集合したものは何であれ、等しく存在するのであり、関係の中でのみ実在的であったり非実在的であったりするるのである。 **

*

See W. L. Reese, *Dictionary of Philosophy and Religion*, p. 348.
' [Meinong's Assumptions or supposings] are instances of affirmation or denial which do not entail commitment.'

**

P.126.

3-1 何も指示しない指示句が指示する意図された対象

こうした対象は、それが信じられていなければ、部分的に信じられてもおらず、「何も指示しない指示句」によって指示される意図された対象であるという点で、幻覚や想像の対象と根本的に異なるのである。幻覚の対象は信じられている限り実在するし、想像の対象は実在になろうと意図するという点において、ある意味で半分信じられているのである。ところが「何も指示しない指示句が指示する意図された対象」とは、ある意味で完全に非実在的な対象なのである。幻覚および想定にあっては、信じられている限り実在的な一つの対象が常にある。尤も想定にあっては、その対象は、[それら自体実在の対象ではないが、必ず存在している諸存在者、即ち、多様な諸視点の統一体] へと、変質して行くのである。想定においては、その対象は実在的であるが、一つの対象ではない、即ち、諸対

象の統一体である、しかし、非実在の対象を意図することにおいては、その対象は一つの対象であるが、実在的ではないとも言えよう。以上のように、ラッセル風に言えば「悪い文法」に基づく、幻覚や想定や非実在の対象の指示においてさえも、ある意味では一つの対象が存在するのであるから、此处では次のような疑問が湧いてくるのである。つまりラッセル風に「文法的に正しい指示句は如何なるものも、一つの対象を指示する*」と言えるのか否かという疑問が生じることになる。つまり、ラッセルの言う意味での論理的に正しい指示句に当て嵌まる物はむしろ対象とは言えないのではないかという疑問である。 **

*

原注, 'On denoting', *Mind*, 1905, p.482. (ラッセルにとっての対象とは、究極的には瞬間的に熟知されている感覚与件 that となる。)

**

P.126.

3-2 マイノングの非実在の対象にたいするラッセルの批判と、 この批判に対するエリオットの批判——指示と意味とは 非連続的に連続している——

例えば、ラッセルによれば「現在のフランス国王」は語の対象としては存在 exist するが、フランスは共和国であるからそれは存在しない。それは存在し且つ存在しないのである。存在の外側にある「丸い四角」は丸くて且つ丸くない存在者なのである。即ち、マイノングの非実在の対象を指示する指示句は、ラッセルによれば、矛盾律に反するというのである。

エリオットによれば、こうしたラッセルの批判が間違っている点は、存在を形式論理学の存在として、即ち孤立した一つの述語として取り扱うのみならず、形而上学的存在として取り扱う点にあるのである。これら二者を連続的に取り扱うならば、問題は生じないのである。ところがラッセル本人は、形式論理学的存在

と形而上学的存在を截然と分離しつつ前者のみを主張しながらも、暗黙のうちに後者を認めてしまっているのである。つまり「～である」という形で、形式論理学的存在を主張するときには、その背後にそうした存在に関する形而上学的存在了解が必要とされるのである。

言い換えるならば、対象の現実存在を主張するにあたっては、われわれは現実存在を指示するのであり、現実存在を意味するのではないのである。そうではあるのだが、このとき、われわれは指示しようという意味するのであり、この指示しようとの意味こそ指示における本質的部分なのである。つまり、意味と指示とは、非連続的に連続しているのである。

以上のことから、エリオットにとっては意味とは形而上学的存在を、指示とは形式論理学的存在を暫定的に指示することが解る。*

*

P.127.

3-3 意味と指示とは切り離すことが出来ない

——現在のフランス王の場合——

指示と意味の区分はなかなか困難な問題である。ある語句をわれわれが使用するときに、われわれが何処まで指示を意味し、何処まで意味を意味するのは、われわれは確かではないのである。又、何処までわれわれが指示を指示し、意味を指示するのも確信できないのである。

「現在のフランス王」という句は、実践的な目的のためには、実在の対象を指示するが意味は持っていないのである。しかしこれではわれわれには不満である。何故なら、命題において使用され得る指示句は、意味を有することを意味しているからである。従ってそれには、意味がないということはないのであり、また語句とは意味を有することなくして指示するということはありえないからである。

ラッセルは指示と意味とを切り離し、

(1) 「現在のフランス王」は指示句である。

と言うことが出来ると考えている。

しかし（この指示句は何も指示しないのであるから），

(2) 現在のフランス王は禿頭である。

とは言えないと考える。

ラッセルにとっては指示句とは記述ないし関数に同じであり、「現在のフランス王」という指示句は「 X は現在のフランス王である」という命題関数に等しいのであって、この命題関数の変項 X を充たす熟知の感覚与件としての値がそもそも存在しない以上、この命題関数は偽となるのであるから、命題(2)において、「現在のフランス王」という性質を持ち、かつ「禿頭」という性質をもつある値 x があるのかと問えば、当然そうした値は存在せず、命題(2)もまた偽となるのである。

ところが命題(1)は、「～である」という述語に見られるように、形式論理学的存在のみでなく、形而上学的存在をも亦、間接的に意味しているのである。（形而上学的存在了解が無ければ論理的存在の理解は不可能である。「～である」はこれら二つの存在を主張している）。語句の指示を意味すれば、その意味を意味するのである。又、語句の意味を意味すれば、必ずその指示を意味することになってしまうというのがエリオットの考えなのである。さらにエリオットに依れば、命題(1)は「現在のフランス王」に関するものであるが、現在の王の存在をある局面において想定しないならば命題とはならないであろう。というのは、われわれが「現在の王」が何も指示しないということを十分に意識してしまったならば、それは指示をなすものではないからである。ところが、その句は指示しようという意味しているとわれわれが言うならば、われわれは意味に内在している視点へとわれわれの身を置いていたことになるのである。従ってこの場合は、われわれは現実に現在のフランス王について述べているのである。

意味と指示において存在はその実践的意味合いを持つのであるが、意味と指示を切り離すと存在は歪曲された意味合いしか持てないのである。一方では、即ち論理においては、ラッセルのように指示句は何も指示しない、従って指示されたものは現実存在しないということもあり得るのかもしれない。しかし指示された

対象はある局面においては存在すると認めざるを得ないのである。存在と非存在の間に如何なる度合いをも認めることのない、ある実践的基準に従うときにのみ、指示された対象が熟知の感覚与件でない場合は、それは現実存在しないのである。他方では、即ち形而上学においては、指示された対象に実践的実在性があることが否定されるならば、それにはある種の希釈されてはいるが均一に実在的な実在性が与えられてしまうのである。従って、存在のこうした不十分な姿を廃棄し、存在の充全なる意味合いを確保するには、意味と指示とは切り離すことが出来ないのである。即ち、存在とは形而上学的存在と実践的存在と理論的存在とが区分されつつ一体となったものなのである。*

*

Pp.127-8.

3-4 再び指示と意味とは切り離せない——キメラの場合——

指示と意味との対比は、切り離されてしまった、混じり気のない実在とその観念との対比ではない。「キメラ（火を吐く怪獣）は現実存在しない*」という命題は「観念的な（頭の中の）キメラは現実存在しない」ということを言っているのではない。従って「キメラは現実存在しない」という命題の主語は表向きは主語（指示）ではあるが、裏は述語（意味）なのである。「キメラは現実存在しない」という命題は「（意味と指示において）実在するキメラの存在しないこと、その非実在性」を主張するものである。普通は「実在のキメラは非実在である」とは言わないのであるが、形而上学的視点から観るならば、この言葉は正しいのであり、他の言明の場合には意味が消失してしまうのである。

さて「実在的キメラ」という語句は二通りに解釈し得るのである。(1)現実に経験されるキメラ、という解釈と(2)「実在的」という語で指示されるキメラ、という解釈の二通りである。「実在的」という語は(1)においては意味において実在的なのであり(2)においては指示において実在的なのである。ところがその一方では、

(1)において、意味として実在的である為には、「実在的」という語は、経験の中で実在的であると現実判断されるような何物かを、(2)の意味において指示せねばならない。又、(2)において、指示として実在的である為には、「実在的」という語は、現実の経験の中で意味を持たねばならない。意味と指示とは切り離せないのである。

(1)と(2)を、「実在的キメラは非実在的である」に投入すると、

(1[′]) 経験されるようなキメラは、実在的ではない。

(2[′]) 実在的（実在のあらゆる条件を満たすような）キメラは、経験されない——経験の中では出会うことがない。

という二者をわれわれは得る。(2[′])では意味を指示する述語を否定することにより、又(1[′])では指示を指示する述語を否定することにより、意味と指示との区分を明確化しているのである。これが指示と意味との唯一の正しい区分である。しかし意味と指示とは本来切り離せるもの同士ではないのであるからこの区分も一時のものである。「経験されるようなキメラ」という語句は実在的キメラを指示するのであるし、「実在的キメラ」という語句は現実に経験されるキメラを意味するものだからである。

従って、指示と意味とは表裏一体であり、指示において実在的であれば、意味においても実在的であるとも言えようし、意味において実在的であれば、指示においても実在的であるとも言えよう。では、意味において実在的で、指示において実在的なキメラとは如何なるものであろうか。

「現実存在しないキメラは、指示においての実在のキメラであり、しかも意味において想像のキメラである」と言えるのであろうか。言えるのである。われわれがその現実存在を否定するものに関しても、われわれはある種の観念を抱くのであり、その観念は以前に理解したように、それが観念的である限り、それが意図する実在でもあるのである。同様に、われわれは次のように言わねばならない。指示句は、指示する限り、実在の対象を指示すると、意味と指示とは表裏一体なのである。 **

観念（意味）はそれが意図する実在でもある。このコンテクストにおいて、指

示句はそれが指示する実在の対象でもあるのだ。意味において実在的で、指示において実在的なキメラは、実在のキメラであるが、現実存在しないのである。

*

原注. F. H. Bradley, *The Principles of Logic*, p. 115. エリオットの文では “Chimaeras do not exist.” となっているが、原文では “Let us take such a denial as ‘Chimaeras are non-existent.’ ‘Chimaera’ is here ostensibly the subject, but really the predicate.” となっている。

**

Pp. 128-9.

3-5 指示とは？——観念（意味）の範囲内において——

指示と意味とは表裏一体であり、指示は観念のコンテクストを超えないのであった。エリオットは観念を手掛かりにして、指示について次のように述べている。

「先の章で、観念の状態に関して述べたことは、以上のような理由から指示句にもある程度あてはまるのである。例えば、観念と指示には、双方ともに対象性の局面があるということが挙げられるのである。そしてこの対象性の局面は、実在の中で実践的経験の対象としてそれ自身を実現しようとの意図を、内包しているのである。観念と語句とは共に実在を指示している。しかし、観念や語句が指示する実在は、観念や語句が指示する限り、その観念や語句に等しいのである。路上で、追い越して引き離れた道路標識のように、語を（対象から切り離し）対象を指すだけのものとして取り扱うことは「単純な論理的間違い mistake」であると言えるかもしれない。「キメラ」という語や「キメラ」という観念は、キメラという実在の始まりなのであり、この実在に断固として連続しているのである。そして「現在のフランス王」という語句ないし観念は既に部分的に実在的なのである。この語句はあなた方の注意をある一つの対象へ

と向けるのであるが、この対象はその対象 *that object* (指示により限定された個物としての対象) でもあるのだから一つの対象なのである。即ち、その観念の仮説的な対象性の局面がその語句の諸特性によって限定されるのであるから、その対象は一つの対象なのである。しかもこの語句の諸特性とは、この語句の実在的性質であると同時にこの対象の実在的性質でもあるのである。丁度この観念がそれ自体へと連関するように、この指示句もそれ自体を指示するのである。しかし、ちょうど観念が物ではない(われわれの抱える難問も観念を物として取り扱おうと試みることより生じてくるのである)ように、指示句もまた物ではないのである。指示句とは「孤立したそれ (*a mere that* = 一つの物、瞬間的に知覚されている与件自体)」ではない。というのは、「孤立したそれ」(実は理論上の限界に過ぎないのであるが)とは、それ以外の何物かを表示しないからである。何故なら、表示とは、本来のもの(観念)であれ代理のもの(指示)であれ、ある種の活動であるからである。観念のように、語や語句はその対象性の外側に存在しているのである。指示句は、言わば対象性の二つの局面に跨がった存在の仕方をしている点で、特に観念に似ているのである。対象性の一方の局面とは、指示を行なう印自体や音自体であり、他方とは、指示される対象のことである。*」

指示とは観念に似て、対象を限定してゆく活動なのである。そして、指示句は自分自身を指示するのであり、ラッセルが考えているように、切り離れた一つの対象を指示するのではなかった。従って、何物も指示しない指示句にあっては、指示句が何も指示しないという矛盾も解消するのである。

*

P. 129.

3-6 非実在の対象が持っている形而上学的難しさ・指示句の存在様態

指示を活動として捕らえる以上のような考え方が、非実在の対象が持っている形而上学的な難しさを克服する為にエリオットが知り得る唯一の方法なのである。その難しさとは、われわれは殆ど対象ならざるもの(形而上学的存在に近いもの)を取り扱っているのであり、われわれが意味の正確で厳密な解釈を主張しようと努力するときのみ、言葉がわれわれに正当性のない理論を受け入れるようにと強要しているのにわれわれは気付くということである。

指示句とは対象ではなく、その存在は複合的な要素を含む指示活動にあるのである。われわれが指示句を指示するときに、われわれが指示するものは、孤立した語句ではないのであって(指示句とは対象ではなく活動だからである)、われわれの方へと向かって次第に対象化してくる趨勢なのである。即ち、その「語」であり、その書かれた印であり、ただ声のみ*、といったものなのである。

こうした「語」とか印とか声といった対象を孤立させれば、それは抽象物であり実在的ではないのである。何故なら、そうした対象からその力、即ちその表示を剥ぎ取ってしまったならば、それはもはや諸特性によって限定された(指示によって限定された)個の対象 that object ではなく、その指示とは全く関係のない何物かとなってしまっているのである。

従って、指示においては、その対象は対象性の一局面に過ぎない。又、指示句について考えるときには、われわれは二つの副次対象とその間の一つの関係へと分解する一つの対象を意味しているといえよう。即ち、印自体、音自体およびそれによって指示される対象と、それらの間の関係からなる一つの対象を意味しているのである。だがこの分析は虚偽化でもあるのであり、一方の副次対象が他方の副次対象を表示すれば、それらは必ずや一つの対象になってしまうのであるから、表示から抽象された二つの副次対象は消失してしまうのである。 **

*

vox et praeterea nihil

**

Pp.129-30.

3-7 実在の対象と非実在の対象

3-7-1 実在の二水準（二つの度合）

以上の考察は、非実在の対象が引き起こした種々の困難の解決に役立つのである。非実在の対象に関するマイノングの理論が持っている難点は、ラッセルの指摘通り、そうした対象は矛盾律に反する（存在するのに存在しない）という点にある。ラッセルの理論が持つ難点は何も指示することのない指示句という点にある。対象は様々な様態で存在するがそれらは実在性の一つの度合においてのみ存在するという仮設に立つ限り、マイノングの立場は支持し得ないものである。

丸い四角は四角であり且つ丸いということは真であるが、それは丸く且つ丸くないというのは真ではない。無論、四角は後の方のコンテキストにおいては丸くないのではある。マイノングのやり方は、実在の二つの水準を混同しているのである。丸くて四角い対象が存在する限り、その対象は四角く且つ丸いのであるが、その対象の四角さと丸さとは、実在のその度合において四角く且つ丸いのである。丸い四角という対象は、四角い形と丸い形とが矛盾するような実在のレベルにおいて現前するのではないのである。ではその対象は、対象としては、非実在的なのかと言えば、そうではなく、実在的なのである。*

*

P.130.

3-7-2 対象の二つの存在様態

対象はわれわれにとって二つの在り方で存在する。(1)われわれが対象を意図す

る状態では、意図された対象はその限りにおいて実在的である。(2)われわれが対象を経験する状態では、対象はそれ自身を実現するのである。つまり対象はある度合の充全性を持った諸関係を要求するようになり、その後、その対象はそれ自身を対象と身做すようになるのである。正常の対象とは、二番目の種類の対象なのである。要するに、(2)の正常で普通な対象を指示する記号が(1)の意図される対象を指示するのであるが、このことは、われわれが(2)の正常の対象で以て、(1)の意図される対象にとってのわれわれの実在基準を設定しているのである。*

*

Pp.130-1.

3-7-3 対象を指示記号で取り扱うときに忘れていること

しかし、われわれは、対象を指示だけする記号によって、対象を処理したり使用したりすることに慣れ親しんでいるのである。そして対象の実在性とは対象を指示することにあるのと同程度に対象を意味することにもあるということを、われわれは忘れてしまっているのである。そして対象とは孤立した存在であることは当然であるという風に考えてしまうのである。こうした思い込みは誤謬といった程度のものではないのである。*

*

P.130.

3-7-4 実在の対象と非実在の対象

成る程、対象とは表面的には対象として孤立して存在するであろう。そうした面は記号による指示のみで表すことも出来よう。しかし対象が対象であるためには、対象はそれ以上のものであらねばならない。対象は経験と深く十分に連続せ

ねばならない。普通は、われわれは対象としての非実在の対象を孤立的に*取り扱わない。常識は、われわれの「実在的」対象を孤立的に取り扱うようにと、そして、われわれの非実在的ないし想像的对象を経験により直接に連続したものとして取り扱うようにと、命じるのである。

ところが、われわれが明確化へと至る**ときには、経験とのこの連続性、即、関連の充満性こそが、われわれの実在の対象をわれわれに与えたのであり、非連続性、即、孤立した意図、こそがわれわれの非実在的对象をわれわれに与えたということが解るのである。対象としての「非実在的」対象とはこうした裸の意図のみが対象局面とされているのである。その一方で、「実在的」対象とは、多くのものを身に纏っているから実在的なのである。そしてそれらの衣が剥ぎ取られるならば、われわれの経験には巨大な穴が開いてしまうのである。しかし、こうした限定を受けていない信じられている部分（関連）は（孤立した）対象そのものではない。何故ならこうした信じられている部分は対象的ではないからである。

従って、非一対象の諸関連ゆえに、ある対象は他の対象よりもずっと実在的である——一つの対象のようである——とわれわれは結論せざるを得ないのである。実在の対象も非実在の対象も、意図されているときには、対象としては、等しく実在的なのである。何れか一方を対象として考えることを止めるようになったときにだけ、他方が実在的となり、一方が非実在的となるように見えるのである。***

*

simpliciter

**

...we come to *preciser*...

P.131.

3-8 存在には位相がある・主語と述語としての「存在する」との関係

非実在の対象は存在するにも拘らず、矛盾律を犯さないとも言えよう。大雑把に言えば、現在のフランス王は存在するし且つ存在しないのである。しかし、同じレベルではそのようには言えないのである。「存在する」とは孤立した属性ではなかったものであり、主に二つの位相を持つものなのである。こうした考えに対する反論として、存在を判断することは同義語反復に過ぎない、何故なら「ある対象はそれが持っている存在を持っているに過ぎない」と言うのに等しいからである、という異論が提出されましょう。こうした反論は、存在の種々の位相が相互に切り離されて、物差しの目盛りのような状態で存在すると言うのならば、有効な反論とも言えようが、存在とは判断において本来種々の位相を持ったものなのである。

「現在のフランス王は存在する」という判断において、われわれが「存在する」と言うときには、存在の度合がコンテキストによって決定されていることを、われわれは意味しているのである。そして、われわれが「現在のフランス王」という主語を表現するときには、主語が持っている実在の正確な度合をわれわれが良く知っている必要はないのである。

言い換えるならば、述語から切り離された名詞は名詞ですらないのである。何故なら、その質の度合が全く知られていないからである。このことは、述語から完全に切り離された名詞は存在しないと言うに等しいのである。というのは、そうした名詞は何も表示しないシンボル（記号）となってしまうであろうからだ。つまり、シンボルでは全くなくなるのであり、他の実在（紙の上の印といったもの）になってしまうであろう。

従って主語は3-7-2の(1)の意味合いで実在的なものであり、述語は(2)の意味合いで実在的なものである。*

*

3-9 言葉が無ければ対象も無い

実践的目的にとっては、シンボルや印 sign はその対象から孤立しているが、エリオットにとっては、そうしたものは対象から適当に切り離せるものではない。シンボルとは孤立したものではなく、それが表示するものと連続しているのである。言葉が無ければ対象も無いのである。孤立して経験され、名称を与えられていない対象は、未だ対象ではないのであって、特殊な知覚の束に過ぎない。対象が対象である為には、対象はある一定の時間、相違における同一を現前させねばならない。以上のことは、高等動物にとっては対象が存在しない、ましてや下等動物にとっては存在しないということを行っているのではない。言葉がある場合と無い場合の対象の違いとは、ある一局面における度合いの違いにすぎない。言葉で表現される以前の知識にあっては、対象はそれ自体として認識された同一性というよりは類似の活動様式に他ならない。同一性が認識されているのではなくて、生きられているのである。このエリオットの論文において、われわれが関心を持っているのは、対象の明晰なる認識であって、これは言葉の始まりと共に生じるのである。犬は猫という名前を知らないが、犬は猫を見て、猫を知るではないかという大雑把な言い方に対して異議を唱える者ではない。しかし、こうした知識は何であるかと言えば、それは習慣の一形式に過ぎないと言えよう。

われわれが対象に今注意しているということを示す唯一の方式は、対象とわれわれ自身 *ourselves* が独立した存在者であるということを示すことである。この為には、われわれは名称を必要とするのである。猫が犬の接近に対して独特の反応を示すように、ある同一の対象の接近において繰り返される表現の中に、習慣があるのか言葉があるのかという問題は、解釈の問題なのである*。習慣であれ言葉であれ、対象と連続しているのである。習慣の場合、検査されている被験者の視点とは区別された観察者の視点から観た場合を除けば、われわれには対象が全くないのであるから、習慣は対象に連続している。言葉の場合、言葉こそわれわれに、孤立した「強い感情」ならぬ対象なるものを、与えるのであるから、言葉は対象

に連続しているのである。言葉が無ければ、われわれには対象が全く無いのである。 **

*

原文では, ...it is a question of interpretation whether in expression which is repeated at the approach of the same object (as a cat may have a peculiar way of acting at the approach of a dog) is behaviour or language. となっている。A. C. Bolgan の指摘に従い、最後の四語の前に there を補い ...there is behaviour or language. とする。

**

Pp.132-3.

3-10 名称において実現されている対象性の局面こそ、 対象が意味する諸経験の基体である

言葉が生まれなければ対象は存在しないという考え方は、発生論的立場と構造論的立場との混同であるとの異論に対しては、これら二者は元々関連の中にあつたということのみを主張したいとエリオットは述べる。又、形而上学は分析を行なうことが出来、分析された一部分を捨て去り他の部分にのみ真理を探し出すことが出来る、ということは認められないとエリオットは述べる。

言葉が無かったならば対象の認識には至らなかったではあろうが、対象は言葉から独立したものとして認識されているという異論もあろう。成る程、われわれが言葉で以て対象を意味しているときには、われわれはその対象を意味しているのであって、その言葉を意味しているのではない。成る程、われわれは同一の対象を別の言葉で以て意味するのかもしれない。尤も、こうした場合、私達は特称的な言葉がわれわれの实在へと織り込まれているときの密接さを過小評価しているのではあるが。だがしかし、こうした意味合いで、われわれが指示している対象とは、対象としての孤立した対象であって、対象が意味している諸経験の束で

はないのである。諸経験のこの束が無いならば、対象としての対象も無いであろう。しかし又、この束が名称において実現されている対象性の局面に依って束ねられているのでなければ、この束は束ではないであろう。

命名という活動が対象をこしらえるのではない。何故なら、命名活動は対象の側よりも早く名称の側から始まるのではないからである。名称が無ければ対象は生じない。しかし対象が無ければ名称も生じないのである。そして名称は、その名称が相応しく見える最初に現われる対象へと適用されるべく準備を調えているのである。又、対象はそれが認識される迄存在しないと言っているのでもないのであり、それが対象として認識される迄は対象は対象性の性格を持たないと言っているのである。*

*

Pp.133-4.

3-11 「それ」と「それ性」との違い・「それ」とは名称であり、われわれは「それ性」を指示する・「それ性」から「何性」が分離されるにつれ「それ」は対象となる

成る程、名称は対象ではない。成る程、名称は私達が対象を把握する際のカテゴリーであるとも言えよう。しかし、もしカテゴリーが対象と対比された主観的な何物かとして考えられるならば、名称はカテゴリーではないのである。むしろ名称は指示の切っ掛けである。名称は指示されるものでもなければ、名称から完全に独立した何物かを指示するのに便利な孤立した手段でもない。名称は名称自体ではない対象を指示するのではあるが、指示されるこの対象は何かと問われるならば、われわれは名称以外に何も答えようがないのである。われわれは独立した対象の特質を指示するのではない。つまり、われわれは対象に関して与えられ得る如何なる定義をも指示するのではない。われわれは対象のなに性*を指示するのではなく、対象のそれ性**を指示するのである。しかし「それ***」でさえ名称

であることを忘れてはならない。私があなた方に、あなた方は何に連関しているのかと問えば、あなた方は対象を指差し「それ」とだけ答えるかもしれない。つまり、あなた方は諸知覚のある種の束を意味しているのであるが、あなた方の意味しているものが、この「それ」という名称を持っていないならば、そのものは対象ですらないのである。あるものがそう在り得る最も孤立した姿は、「それ」であるということである。つまり孤立した対象であるということである。従ってわれわれが指示しているものは「それ」ではないのである。われわれが「なに性」という語と「それ性」という語とを適切に区分できるまでは、「それ」は対象ではないのである。もし私達がある物に何らの名称を与えないとするならば、その物は如何なる物であろうか真剣に考えて頂きたい。その物は対象ならぬ諸感覚へと溶解してしまうであろう。その物は私達が正しい名称を探し出すまでは、その物がそうである特称的な対象ではなくなるであろう。****

*

whatness

**

thatness

that

P.134.

3-12 正しい名称を持って初めて正しい対象を得る・想像の対象の名称は 想像領域における実在の対象の名称である

それぞれの名称は一連の諸経験を有機的に連関させるそれぞれの方法であるのだから、われわれがその名称を持つまではわれわれはその対象を持たないのである。その一方では、われわれが正しい対象を持つまではわれわれはその名称を実

は持っていないのでもある。名称がある物の名称でないならば、名称は名称でない。つまり、如何に微かなものであっても、意味の感情が、名称と孤立した音の複合体*との違いを作り出すのである。

われわれが名称を与えることの出来ない対象は、未だにその対象の前兆に過ぎないように、姿が未だに明確ではない対象の名称はその名称の前兆に過ぎないのである。われわれの知る限りでは、名称が孤立して「対象」を指示するとき、非常に特殊な名称をわれわれが使用し気が咎めることが間々ある。しかし名称は特称性を内包しているのである。次のようなことは、仮説上の限界であり、その限界に到達することは決してないのであるが、(エデンの園の動物達のように)対象達は遭逢され名称を与えられるのを待ちながら彷徨っているとも空想出来よう。同様に、名称達は対象達を待ちながらわれわれの頭の中を彷徨っているとも空想できよう。但し、空想という言葉をわれわれが好むならの話ではある。「實在の」世界が「われわれの頭の中に」無いのと同様に、想像的对象も想像的實在領域も「われわれの頭の中に」無いのであるから、名称の方も想像的領域内にある實在の対象の名称なのである。

「現在のフランス王」は「實在的」世界の中にある何物かの名称ではない。それどころか、實在的世界にあっては、「現在のフランス王」は全く名称ですらないのである。もし、あらゆる想像的諸世界から切り離されたこのような實在世界があるとすれば、「現在のフランス王」とは實在世界における切り離された雑音に過ぎないのである。 **

*

Laut-complex

**

Pp. 134-5.

4. 閑話・理論と実践は一体である

4-1 名称は幻覚においてさえも対象と一致する・ある度合いを持った実在は幻覚においてさえも見い出さう

われわれがその名称に対する完全なる対象を持つまでは名称を持ったとは言えないのであり、又その対象に対する完全なる名称を持つまでは対象を持ったとは言えないのであった。しかし名称と対象とのこの神秘的な一致が起こる点は正確には決定しえないのである。

子取り鬼の霊に怯えている子供が自分は熊を見ているのかも知れないと思うとき、それは本人にとっては幻覚の熊であるが、それを観察している私にとっては、その熊は想像上の熊である。こうした子供が見ていると想像される熊の場合、名称と対象との一致はどの点で起こるのであろうか。答は幻覚において起こることになるのである。その子供は熊が如何なるものを意味しているかを知らずに「熊」なるものを意味している。しかしその子が実在の熊に反応するであろうと同様に、その悪霊に反応したのならば、その子の精神の中にある「熊」という名称には、その名称を裏から支える実在の熊があるのである。その名称は経験の中で表示が終了してしまったのである。「キメラ」という名称も、それが意味を持つと認められる限り、そして孤立したその言葉だけが存在するのではないと認められる限り、経験の中で表示が終了するのではあるが、その言葉は実在の対象を持っているのである。ある度合いを持った実在は幻覚においてさえも見いださうるのである。*

*

P.135.

4-2 形而上学的実在の世界は実在の世界と非実在の世界との分裂を生ずる

以上の如く、形而上学的実在でさえ、ある度合いを持った実在であるとも言えるのである。従って一つの無矛盾の実在的世界があるのであり、他は幻影であるという形而上学的想定は実在と非実在の分裂を引き起こすだけであり、何ら有益な成果を挙げるものではない。先ず実在世界があつて、それに関してわれわれの想像を廻らすのではないのである。実在や非実在を指示することは、実践的、近似的に構成される世界に関して有効なのであり、形而上学的視点からなされることではない。形而上学的視点から観れば、実践的に構成される世界とは、漠然としており、不正確であり、解決不能の矛盾にあふれたものになってしまうのである。形而上学的視点のみの主張は実在と非実在との二元論に陥る。*

*

Pp.135-6.

4-3 認識論的実在の世界は存在者が総て均一の実在性を持つ、 固い一元論となる

認識論的実在の世界は総てを実在と見做すのであり、以前は知覚の中にあつた総ての非実在を思想的実在へと押し込めてしまうのである。そして存在を孤立した概念としてのみ考えるのである。この無矛盾の実在的世界にあつては総ての存在者が均一に実在的になってしまう。この世界は堅固で揺れがなく、存在者は「何性 whatness」と「それ性 thatness」とが分かち難く対になっている。実践的に構成される世界の存在者が持つ、実在と非実在とは、認識論的外的視点から観れば、均一の実在性へと歪化されるのである。われわれは実在世界が先ずあつて、そこからわれわれの「実在」世界を構成するのではない。このように理論的に説明される世界とはテーブル*の上に拡げられた世界で、孤立してそこにあるに過ぎない。一つの無矛盾の実在的世界とそこにおける総ての存在者の均一的実在性という想

定とは、一般人の常識（共通感覚）にも適ったものではある。 **

*

精神と事物はテーブルと床が共存するように共存するというアリグザーダの考え（第三章）が元になっている。テーブルはプルーフロックの手術台にも繋がるであろう。

**

Pp.135-6.

4-4 形而学的世界と理論的世界と実践的世界は区別されるが一体である・ 前二者の分裂は実践的世界において統一を見る

形而上学的実在の世界や認識論的実在の世界においては、実在と非実在との二元論的分裂が生じたり、均一な実在のみの固い一元論が生じるのであった。ところが「実在的」という言葉の指示は、その言葉の意味から解き放てないのだから、存在を孤立した概念としてのみ考えたり、形而上学的存在としてのみ考えることは出来ないのである。われわれが理論において忘れがちなことは、実在的世界の展開活動は二つの方向へと展開するということである。実在と非実在とは密接に関連しつつ展開するのである。もしわれわれが世界を次のようなものとして考えるならば、実在と非実在との二元論的分裂という矛盾は消え去るのである。即ち、世界をレディー・メイドのものとしてではなく、あらゆる局面ごとに構成され、乃至は自己構成するものとして、しかも近似的な構成物で、その生成において本質的に実践的な構成物として考えるならばである。つまり、われわれにとっての意味の世界を考えれば良いのである。今、自己構成する世界といったのは、精神によって構成される世界は、形而上学的実在の世界と二元論的分裂を起こすからである。実在と非実在を指示することは実践的視点に適ったものであり、形而上学的視点に相応しいものではない。形而上学的視点から観れば、実践的実在世界は本質的に曖昧であり、不正確であり、解決不能の矛盾なるものに充ちあふ

れている。又、実践的に構成されて生起した存在者は純粹に理論的視点でもって説明出来ないのである。認識論的外的視点から観れば、実在的と非実在的とは、均一の実在性を帯びるからである。

われわれが説明を探し求める際に放棄した内的視点から観てのみ（実践的世界においてのみ）、実在と非実在との比較は生起し、又、その比較も意味を持つのである。*

*

P.136.

4-5 理論的視点は実践的視点から生じる・純粹な理論は殆どない

実践的な世界は実践的視点ゆえにそうした世界なのであり、われわれが何とかして説明せんとする世界は孤立してそこにある世界なのであった。従って、実践的世界は理論的視点から完全には説明出来ないのであった。ところが理論的視点は実践的視点から必然的に自然に派生してくるものなのである。

つまり実践的に、**対象を意味することによって**、われわれは対象へと到達するのである。というのは、諸感覚が（論理的）注意点の回りにそれら自身を組織化し、その結果、感情の世界が自己と対象の世界へと歪曲されてしまうからである。以上のようにして、われわれは指示によって組成される対象を手に入れるのである。

しかし、われわれが指示するものは、それが又対象ではないとの正にこの理由から、対象としての存在を持っているのである。何故なら、対象としては、指示されるものは孤立した指示、即ち、意図の影を投写（対象化）したものだからである。**実在的な対象**としては、それは対象ではないのであって、指示点の回りに群がる諸経験の全体（諸感覚の束ならぬ、あらゆる連関と観念的關係）なのである。

さて実践的には、われわれは複合的意味連関を使用するのであろうか、それと

も孤立した指示を使用するのであろうか。最終的な解答は得られていないのである。何故なら、実践的態度を理論的に説明することは、外的視点からの記述を行なうことになるであろうし、実践的態度を「実践的に」説明することは、理論から孤立したわれわれの実践の理論となってしまうであろうからだ。実践の理論も理論の実践も等しく的外れであろう。何故なら、前者は必ずや総てを意味へと還元するであろうし、後者は総てを指示へと減じてしまうであろうからだ。対象が対象である限り、われわれは無論常に対象の指示を意図するのである。しかし、実践的には、対象は部分的にないし時たま「孤立した対象」なのであり、その正確な部分と頻度とをわれわれは決定出来ないのである。 **

*

Pp.136-7.

4 - 6 均一の実在のみを取り扱う絶対的理論はない・

理論は実践に一体化している

実践には理論がいっぱい満ちている。理論にも実践が満ちている。感覚から主観—客観（対象）の相関に至るまでの仮説上の推移は理論上の行為である。実在的世界の想定も理論である。如何なるものも理論無しの孤立した状態では見いだせないのである。従って、理論と実践との区分は何処にも明確には引くことが出来ないのである。「われわれ自身の為に」われわれが想定を行なうのか、それとも純粹に思索を愛好して想定を行なうのかは、如何なる場合にも相対的区分の問題なのである。しかし、一般的には、理論と実践の区分線がより鋭くかつより完全になればなる程、説明はより理論的になるのである。このように、われわれが実践を定義しようとす試みるときに、われわれは理論を得るのであり、理論はわれわれの実践に一体化するのである。こうした理由から、われわれの理論は実践的動機と実践的結果で満たされていることが知れるであろうし、われわれの実践は大いに思索に基づいていることが知れるであろう。均一の実在のみを無矛盾的に

扱う絶対的理論はないのである。*

*

Pp.137-8.

5. 閑話休題

5-1 理論とは均一の実在を取り扱う正確な記述や説明ではない・

理論は実用性という相対的価値を持つ解釈に他ならない

ここで、われわれの対象へと話を戻すならば、実在的と非実在的との諸関係をわれわれは正確に記述したり説明したりすることは決して出来ないとの結論を得るのである。何故なら、われわれが思考を開始するまでは、このような問題は存在しなかったからである。尤も、こうした思考は元々、幻覚とは真であるのか偽であるのかを実践的に判断しようとするところから、われわれに強制されたのである。実践的には、前にも述べたように、われわれは「実在的」という言葉を二つの意味合いで使用するのである。そうしたところから、われわれは、実践的の内部で実践的視点から理論的視点へと飛ぶのである。

なる程、「キメラは存在しない」の理論的説明は「実在的キメラは実在的ではない」であったろう。これは「キメラは存在しない」の理論的説明でもあり、われわれが実践する理論でもあり、われわれが実践する理論の理論的説明でもあろう。さもなければ、実践と理論は二元論的分裂に陥るのであろう。

だがしかし、あらゆる判断には、実在と非実在との比較が生じてくるのである。もしこうした比較が行なわれなければ、われわれは、判断とは孤立した非実在の観念内容の述定に他ならないとしか言えないであろう。だが、こうした比較は、その個物に関する判断が有する関心領域の外側にある視点（孤立した外的理論的視点）から観れば、矛盾という形式において否定されるのであり、常に比較とは別のものを意味しているのである。

しかし、先の諸説明は最終的には、多少の実用性を持った孤立した解釈に他ならないのである。「キメラは存在しない」をわれわれが了解しているならば、それは何の説明も必要としないのである。もしわれわれが了解していないならば、われわれは何も見いだせないのである。「(現在の) フランス王は禿頭である」は、そのコンテクストと関係に応じて真、偽、無意味となる。

理論は非常に正確な結論を出さねばならないということはないとエリオットは述べている。われわれは一般原理を得たのである。そして、その完全なる精密性を要求しなければ容認もしないのである。*

*

P.138.

**5-2 対象は認識者の場に直接に存在するのであり、その認識に
カテゴリーや心理学的装置を必要としない・対象の対象性はその実在の
一局面であり、自給自足していないが依存もしていない**

これまでにエリオットが述べてきたことは、ブラドリの形而上学は何の関係もなさそうに思えもしようが、認識について論じる際にエリオットのとった立場は、彼の形而上学(真理と実在の度合いと内的連関の理論)を支持するものであった。何故なら、こうした視点からは、解決せねばならぬ認識の難問が存在しないからである。認識論者の資本たる、内部と外部の区分は存在しえないのである。

「観念」という言葉は、対象と知覚者との間にある何か(「物」)を表示しないが、世界の実現活動の一段階を表示するのである。対象とは、対象がある限りにおいては、カテゴリーや心理学的装置を介在せずに、認識者の場へと現前するのである。知識は知識以外の如何なるものに依っても定義付けられない。知識に関する難点があるとすれば、それは知識とは孤立した知識ではなく、別の局面を持っているということである。

ところが、われわれは次のように考えがちなのである。即ち、対象を「物」と

して、つまり、あらゆる状況の下においても対象であると、考える傾向があるのだ。この結果逆に、対象が認識されていないときには、対象は完全に対象ではなくなるのである。つまり対象は意味の中に含まれることはなく、その姿を完全に消し去ってしまうのである。

しかし、幻覚のように経験内に留まる場合でさえも、対象は対象以上のものであるから、対象でありうるというのがわれわれの立場のであった。対象の対象性、即ち、対象の被指示性、とは対象の実在性の孤立した一局面なのである。その局面は、隠喩的には意思の活動（能動）に依って維持されており、自給自足のものではないと言えよう。しかし、対象性の局面は、客観面に依存していないのと同様に主観面にも依存していないのである。又、能動性という考え方が如何なる意味合いにおいても可能であるということも絶対にはないのである。*

*

Pp.138-9.

5-3 注意される対象（対象の統一面）は直知される・

対象の対象性は経験を通して生じる

実在的世界（実在的对象の世界）は、われわれが直接に接触している何ものかなのであり、変動し不正確で不均一ではあるが非常に実在的（あなた方が望むだけ実在的）なものである。実在的世界の認識者にとっての「関係」は、ここでは問題にされない。知識は関係ではないからである。実在的世界は内側にも外側にもない。実在的世界は意識の中にも意識に対しても存在者の特殊なグループとして与えられない。何故なら、与えられた状態では実在的世界は意識に対しても中にも存在することは全くないからである。つまり実在的世界は主観との関係においてではなく存在するのである。

次のような考えは意味がないのである。即ち、認識においては意識は能動であるとか受動であるとか、注意という単なる心理—生理学的現象を超えた「意識」

があるとか、意識は意識の対象で「ある」とか意識の対象とは異なるとか、いった考え方である。

認識とは経験というより大きな活動の一部を孤立させたものなのであった。しかもどの点でわれわれが真の認識を得るのかはいつ迄経っても決定不能なのである。われわれの経験の中には、常に狭義の「外的」実在世界があるのである。何故なら、われわれにとってのあらゆる存在 existence*の中には、常に一つの注意の實在的对象があるからである。そして注意の實在的对象がある限り、対象とは直知されるが直接には経験されないのである。何故なら、対象が対象であるには、対象は常に経験を通して抽象された諸性質（多様）以上の何ものか（統一）であることを意味されているからである。そして対象の統一性が直知されるには、対象は直接に経験されるわけにはいかないからである。**しかし、対象としての対象は自給自足ではありえない。対象の対象性とは孤立した外在性である。ところが如何なるものも孤立した外在ではありえないのであり、外在から孤立したそのもの自体の「為」の存在 being***を所有せねばならない。そしてこちらの存在の方が直知されるのである。

しかし、対象を対象として意味することは、それを対象以上のものとして、即ち、究極的に實在的なものとして、意味することを意味しているのである。従ってこのようにして、あらゆる対象は、われわれをそれ自体を超えて、一つの究極的な實在へと導くのである。そしてこのことが、われわれの形而上学を正当化するるのである。****

*

any existence worthy of us: 外的視点からの存在

**

原注：「砂糖は単なる白さや単なる固さや単なる甘さでは明らかにない。というのは、その實在性はともかくその統一にあるからである。しかも、もしその一方で、われわれがその物の中にその幾つもの属性以外に何が有り得るのかと尋ねれば、われわれは又もや困惑するのである。われわれはこれらの属性の外側にも、

又、内側にも実在的統一を発見出来ないのである。」 *Appearance and Reality*,
p.16.

内的視点からの存在

Pp.139-40.

5-4 実在的世界は様々な限定中心の共通の意味と「同一表示」にある

総ての限定中心によって把握された諸対象は把握された実在的として存在する。ここから生じる問題は、これらの諸中心の諸世界が如何にすれば一つの世界を形成すると言えるかという問題である。何故なら、われわれの個々の場に現前するものが順応すべき外的で固定した世界という意味での実在の「客観的」諸基準というものがないからである。

実在世界は様々な限定中心に共通の意味とそれらの「同一表示」とにあるのである。ここから生じるのは、ブラドリ氏の哲学にとって重要な問題、諸限定中心と独我論の問題である。*

*

P.140.